

分詞構文：現れる位置と用法の変化

— 2 英文法書と *Newsweek* 誌との比較 —

富田 禮子

1. はじめに

英文法用語の一つである分詞構文は「話しことば」より「書きことば」ではるかによく使用される ((Quirk et al: 8. 13) 語法である。Quirk et al: *A Comprehensive Grammar of the English Language* では-ing / -ed participle clause (1985 : 14.6他) として扱っている。また、包括的な英文法書として初版 (1960年) 以来第4版まで改訂を重ね、日本語訳もある Thomson & Martinet: *A Practical English Grammar* (1988, 378-383) では分詞の果たす機能が主節或いは従属節に等しいとして記述され、取り上げている5項目は Quirk et al. にすべて含まれている。この2つの英文法書を資料として使用する。

分詞構文の現れる位置については、文頭 (initially)、文中 (medially)、文末 (finally) がある (Quirk et al: 15.53)。上記の2英文法書で分詞構文の用法を示す例文が、文中のどの位置で用いられているか調べることを最初の課題にした。英文法書として著名な両書ともに1980年代半ばの出版である。「今の書きことばで分詞構文は文中のどの位置で用いられているのか」その実態を少しでも把握するために、「書きことば」の資料として *Newsweek*, Mar. 22, 2004, Apr. 12, 2004, May 17, 2004の3号について分詞構文を抜き出し、その生起する文中の位置による分類を試みた。分詞構文が使用される位置に関して、英文法書と *Newsweek* 誌の相違を明確に数値で示すことができた。文法書の分類 (表1~表2) と *Newsweek* 誌の分類 (表3~表5) との比較は文法書の説明と現在の書き言葉との「ずれ」を明白に示している。即ち、文法書の用例とは異なり、*Newsweek* 誌では文頭に-ingで始まる分詞構文は少なく、文末の用例の方がはるかに多い。

分詞構文の主語は文全体の主語と一致する。そうでなければ、分詞構文の主語を持つ独立分詞構文となる。この規則に違反するものは懸垂分詞構文と呼ばれるが、慣用句として定着しているものもある。僅か3冊ではあるが *Newsweek* を資料に分詞構文の主語について検討した。その結果、分詞構文の現れる位置の変化は用法の変化でもあると主張したい。これが本稿の狙いである。

2. 分詞構文の現れる位置による分類：Thomson & Martinet:

A Practical English Grammar の場合

分詞構文は理由、時、条件、譲歩など文脈によって適切な接続詞の意味を含む。その意味に従って分類されることが多いが、分詞構文の現れる位置によっても分類できる。日本では江川に

よる翻訳が「高校程度以上の英語学習者や研究者に利用されている」Thomson & Martinet (1988, vi) の「実例英文法」を最初の調査資料とした。Quirk et al.と同様「書きことば」で使われる(1988:378)と指摘したうえで、分詞構文について5項目に分けて説明している(1988:378-383)。テキストの全用例総計40例を分詞構文の現れる位置に従って分類を行う。分類の方法を明確にするために、同書からの用例を1~2文(カッコ内の数字はページ)ずつ示すことにした。現在分詞で始まる分詞構文の中には完了形(having+過去分詞)、受動態(being+過去分詞)、受動態の完了形(having been+過去分詞)も含まれるが、過去分詞で始まる分詞構文はbeing(時にはhaving beenのこともある)が省略された-edに限られる。

2.1. 現在分詞(-ing)で始まる分詞構文

文頭の例 (1) *Taking off our shoes we creep cautiously along the passage.* (378)

重なって、現在分詞が現れる場合がある。文頭の例として別々に数え2例とした。

(2) *Not knowing the language and having no friends in the town, he found it hard to get work.* (380)

文中の例 (3) *Romeo, believing that Juliet was dead, decided to kill himself.* (382)

文末の例 (4) *He fired, wounding one of the bandits.* (379)

次の例では、2つの動作が現在分詞で表されているが、striking ... and cutting ...を文末として分類し、2回に数えている。

文末の例 (5) *I fell, striking my head against the door and cutting it.* (379)

次に、完了形の用例では3つの位置をとることが可能であろうが、文頭だけで、文中及び文末の用例は示されていない。

(文頭の完了形) (6) *Having failed twice, he didn't want to try again.* (381)

受動態(being+過去分詞)の用例はなく、受動態の完了形の分詞構文(having been+過去分詞)は2例とも文頭の場合である。

(文頭の受動態の完了形) (7) *Having been bitten twice, the postman refused to deliver our letters unless we chained up our dog.* (382)

分詞自身の意味上の主語を持つ独立分詞構文(8)では、its bombsはexplodingの意味上の主語である。

(文末の独立分詞構文) (8) *The plane crashed, its bombs exploding as it hit the ground.* (379)

いわゆる懸垂分詞構文の中には、慣用句として使われている場合がある。副詞の位置はカッコの通りいずれの場合も可能である。

(文頭の慣用句) (9) *(Strictly) speaking (strictly), this sentence is not grammatical.* (383)

2.2. 過去分詞(-ed)で始まる分詞構文

以下のように、3つの位置での用例が示されている。

文頭の例 (10) *Aroused by the crash, he leapt to his feet.* (381)

文中の例 (11) *Tom, horrified at what he had done, could at first say nothing.* (382)

文末の例 (12) *Jones and Smith came in, followed by their wives.* (382)

Thomson & Martinet (1988, 378-383) で記された全用例を文中のどの位置に分詞構文が現れるかによって分類したのが次表である。

表1 Thomson & Martinet (1988, 378-383) の用例：分詞構文の位置による分類

	文頭	文中	文末
-ing で始まる分詞構文	17	1	5
完了形分詞構文 (having+過去分詞)	4	0	0
受動態分詞構文 (being+過去分詞)	0	0	0
受動態の完了形分詞構文 (having been+過去分詞)	3	0	0
独立分詞構文	1	0	1
懸垂分詞 (慣用句)	1	0	0
合計	26	1	6
-ed で始まる分詞構文	4	1	2

3. 分詞構文の現れる位置による分類：Quirk et al: *A Comprehensive Grammar of the English Language* の場合

3.1. 現在分詞 (-ing) で始まる分詞構文

テキストの末尾にある Index の -ing participle clause の項目すべてから用例を選び出した。次のような視点から a, b に関するものは分類に含めていない。

- a. 辞書では considering, supposing, providing など現在分詞ではなく接続詞として扱われている。
- b. 接続詞+-ing の構文は省略形と考える (Quirk et al. 14.19)。

(13) *When returning merchandise*, be sure to bring your receipt. ['When you return ... or 'When you are returning ...']

3.2. 過去分詞 (-ed) で始まる分詞構文

テキストの末尾にある Index の -ed participle clause の項目すべてから用例を選び出した。次のような視点から c, d に関するものは分類に含めていない。

- c. 辞書では given, granted, provided など現在分詞ではなく接続詞として扱われている。
- d. 接続詞+-ed の構文は省略形と考える (Quirk et al. 14.8)。

(14) *When (she was) questioned*, she denied being a member of the group.

Quirk et al. では独立分詞構文が細分類されているのが異なっているだけで、Thomson & Martinet の表1と同じ分類によって得られたのが次表である。(-ing) と (-ed) を一つの表にまとめている。

表2 Quirk et al の用例：分詞構文の位置による分類

-ing	文頭	文中	文末
-ing で始まる分詞構文	19	8	1
完了形の分詞構文 (having+過去分詞)	2	2	0
受動態の分詞構文 (being+過去分詞)	0	0	0
受動態の完了形の分詞構文 (having been+過去分詞)	1	0	0
独立分詞構文			
a. 現在分詞	1	0	0
b. 完了形	3	0	0
c. 受動態の完了形	3	0	0
懸垂分詞 (慣用句)	5	0	0
合計	34	10	1

-ed	文頭	文中	文末
-ed で始まる分詞構文	9	2	0
独立分詞構文	3	0	0
懸垂分詞 (慣用句)	2	0	0
合計	14	2	0

4. 分詞構文の現れる位置による分類：Newsweek 誌の場合

分詞構文の現れる位置については、文頭 (initially)、文中 (medially)、文末 (finally) がある (Quirk et al: 15.53) との記述があるが、表1及び表2によって、2英文法書では圧倒的に文頭の用例が多いことが明らかになった。英文法書として著名な両書ともに1985年の出版である。「今の書きことばで分詞構文は文中のどの位置で用いられているのか」その実態を少しでも把握するために、「書きことば」の資料として *Newsweek*, Mar. 22, 2004, Apr. 12, 2004, May 17, 2004 の3号について分詞構文を抜き出し、その生起する文中の位置による分類を試みた結果が、表3、4、5である。

前述の Quirk et al: *A Comprehensive Grammar of the English Language* の項目と同じ扱いにし、3.1. a, b及び3.2. c, dで述べたものは分類から除外した。*Newsweek* 誌3号各々の中で最も使用頻度の高かった including は接続詞と見なし、分類表には含まれていない。各号の分類は表3～表5である。

表3 *Newsweek*, Mar. 22, 2004 号の用例：分詞構文の位置による分類

-ing	文頭	文中	文末
-ing で始まる分詞構文	10	20	34
完了形の分詞構文 (having + 過去分詞)	1	2	0
受動態の分詞構文 (being + 過去分詞)	2	0	0
受動態の完了形の分詞構文 (having been + 過去分詞)	1	0	0
独立分詞構文			
a. 現在分詞	1	0	1
b. 完了形	0	0	0
c. 受動態の完了形	0	0	0
懸垂分詞 (慣用句)	1	0	0
合計	16	22	35

-ed	文頭	文中	文末
-ed で始まる分詞構文	13	9	5
独立分詞構文	1	0	0
懸垂分詞 (慣用句)	0	0	0
合計	14	9	5

表4 *Newsweek*, Apr. 12, 2004 号の用例：分詞構文の位置による分類

-ing	文頭	文中	文末
-ing で始まる分詞構文	14	16	59
完了形の分詞構文 (having + 過去分詞)	1	2	0
受動態の分詞構文 (being + 過去分詞)	0	0	0
受動態の完了形の分詞構文 (having been + 過去分詞)	0	2	0
独立分詞構文			
a. 現在分詞	1	0	2
b. 完了形	0	0	0
c. 受動態の完了形	0	0	0
懸垂分詞 (慣用句)	1	0	0
合計	17	20	61

-ed	文頭	文中	文末
-ed で始まる分詞構文	8	18	19
独立分詞構文	0	0	0
懸垂分詞 (慣用句)	0	0	0
合計	8	18	19

表5 *Newsweek*, May 17, 2004 号の用例：分詞構文の位置による分類

-ing	文頭	文中	文末
-ing で始まる分詞構文	7	13	45
完了形の分詞構文 (having + 過去分詞)	1	0	1
受動態の分詞構文 (being + 過去分詞)	0	0	0
受動態の完了形の分詞構文 (having been + 過去分詞)	1	0	0
独立分詞構文			
a. 現在分詞	1	0	1
b. 完了形	0	0	0
c. 受動態の完了形	0	0	0
懸垂分詞 (慣用句)	1	0	1
合計	11	13	48

-ed	文頭	文中	文末
-ed で始まる分詞構文	11	10	14
独立分詞構文	0	0	6
懸垂分詞 (慣用句)	0	0	0
合計	11	10	20

5. 2 英文法書と *Newsweek* 誌との比較

5.1. -ing で始まる分詞構文は英文法書では文頭に、*Newsweek* では文末に多い

これまで分詞構文が現在分詞 (-ing)、過去分詞 (-ed) のどちらで導かれるかによって大きく2種類に分類して表を作成してきた。表1～表5のどの調査でも、過去分詞 (-ed) より現在分詞 (-ing) で導かれる分詞構文が多い。このことから、本稿では-ing で始まる分詞構文について考察することにした。先ず、資料のテキストについて説明を追加したい。表1の資料とした第4版 [改訂版] の Thomson and Martinet の初版本は、*A Practical English Grammar for Foreign Students* として1960年に出版された。1969年の2nd Edition の分詞構文の記述と比較すると1985年の第4版 [改訂版] には次の2例が追加されているだけである。

- (15) *Having eaten his dinner* he rushed out of the house. ('*Eating ...*'を使うと意味があいまいになるので、完了形の分詞構文にする)
- (16) *Being athletic*, Tom found the climb quite easy. (cf. *Being fine*, we decided to go swimming.のような懸垂分詞構文をさけるために、分詞構文の主語は文の主語に一致させる)

第4版の他の用例は上記の2例(15)(16)を除けば第2版とまったく同じであることを考えると、表1は資料としてかなり古い用例に基づいていることは確かである。一方、表2の資料とした Quirk et al: *A Comprehensive Grammar of the English Language* (1985年出版) は現代の英文

法書として評価が高い。しかし、現在分詞 *-ing* で始まる分詞構文の調査結果では文頭に現れる用例は、表 1 では78%、表 2 では75%を占め、同じ高い割合である。表 1 の資料は確かに古いですが、それにもかかわらず表 2 の用法と殆ど変化がないことが分かる。更に、第 4 版 [改訂版] の Thomson & Martinet 原著は1985年、即ち、Quirk et al: *A Comprehensive Grammar of the English Language* と同じ年に出版されている。文法書の用法では共通して、(*-ing*) で始まる分詞構文は文頭に用いる頻度が高いものとして扱われていると主張できる。

「書きことば」の資料として *Newsweek*, Mar. 22, 2004, Apr. 12, 2004, May 17, 2004 の 3 号を取り上げた。*Newsweek* 誌の調査に基づく各表は文法書との相違を明確に数値で示している。

(*-ing*) で始まる分詞構文は文頭に用いられることが少なく、文末で現れる用いられることが圧倒的に多い。又、文中で用いられ方が文頭の場合よりも多いのである。言い換えると、文法書の記述とは異なり、文頭で用いられることは文中、文末の用法に比較すると極めて少ないことが明白になった。

5.2. *Newsweek* 誌の (*-ing*) で始まる分詞構文：大多数が文頭ではなく文末に現れる

「今の書きことばで分詞構文は文中のどの位置で用いられているか」その実態の把握のために行った *Newsweek* 3 冊の資料の調査結果、文頭の用法の減少と文末の用法の増加が指摘できる。それぞれの要因を考察する。

5.2.1. 文頭の用法の減少の要因

表 1、表 2 の英文法書と異なる点は *Newsweek* では文頭に分詞構文の用例が少ないことである。動名詞構文との関連で文頭の用法の減少の要因を考えたい。文頭に分詞構文の多くが、「分詞構文の主語は文全体の主語と一致する」という規則にかなっている。次の(17)~(21)の例文では文頭に用いられている分詞構文のコンマに続く名詞が分詞構文の主語である。

- (17) *Adopting a low-calorie diet, Sawada* gradually dropped the weight over the course of the project, which lasted 20 weeks or so; ... --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p. 50.
- (18) *Fearing mass protests, Russia's Parliament* gave initial approval last week to a new law that would prohibit public demonstrations ... --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p. 6.
- (19) *Growing up in Portland, Oregon, my kids* spent rainy afternoons playing at Burger King. -- *Newsweek*, Mar. 22, 2004, p. 9.
- (20) *Riding the victory, Roh* should emerge from this week with a stronger mandate than he's had at any time since his Inauguration. --*Newsweek*, May 17, 2004, p. 5.
- (21) *Questioning Rumsfeld, the Arizona Republican* reduced the normally self-assured Pentagon chief to a helpless sputter ... --*Newsweek*, May 17, 2004, p. 26.

分詞構文の文頭の用法は、動名詞の *-ing* が文頭に現れる動名詞構文と類似している。用例(22)では分詞構文と同様コンマが続いている。分詞構文であれば主語の名詞があるはずのところ動詞があることにより *-ing* が動名詞だと判別される。追加調査に協力した学生たちは文頭の *-ing* が現在分詞か動名詞かの判別に手間取った。

(22) Changing the curriculum of the madrassa might be helpful, but ... --*Newsweek*, Mar. 22, 2004, p. 12.

(23) Hiring someone to whom you're going to entrust your house and children is no easy task. --*Newsweek*, May 17, 2004, p. 9.

ことばの経済性（クルマス：335）が重要視される現代にあつて、動名詞構文との混同を避けるために、-ing で始まる分詞構文が減少したと考えられる。現在の語順の固定した英文構造では、文頭にあるものが主語だと判断する意識が強く働く（荒木、安井：1597）。主語として機能する動名詞構文に押されて文頭の分詞構文の用法は衰退の傾向にあると推察される。連続して用いられた動名詞が主語となる例も見られる。

(24) Refusing to dismantle them and thinking that a wall will help to hold that stolen land forever is hubris. --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p.11.

5.2.2. *Newsweek* 誌：文末の用法の増加の要因

表1、表2の英文法書との際立つ相違は表3～表5の*Newsweek*では文末の分詞構文の用例が多いことである。分詞構文の主語との関連で文末の用法の増加の要因を考えたい。文法書は「分詞構文の主語は文全体の主語と一致する。そうでなければ、分詞構文の主語を持つ独立分詞構文となる」と説明する。この規則に違反するものは懸垂分詞構文と呼ばれるが、慣用句として定着しているものもある。ここでは独立分詞構文、慣用句は扱わないことにする。文頭の用法の場合、分詞構文のコンマの後の文の主語が分詞構文の主語でもある。文末の用法の場合、それとは逆に分詞構文の主語は前置された文の主語と同じである。以下の例文では、文末の分詞構文を導く-ing及びその主語がイタリック体で示されている。文の主語が分詞構文の主語の機能を果たしている。

(25) *Suicide bombers* hit Shiite religious rites in Baghdad and Karbala, *killing* 185 in the deadliest day since Saddam's fall. --*Newsweek*, Mar. 22, 2004, p. 28.

(26) *Big multinationals* are building billion-dollar factories, *inspiring* hopes of an industrial renaissance. --*Newsweek*, May 17, 2004, p. 32.

(27) In fact, *such stewards* more often act as forceful independent board members, *keeping* a tight check on the kind of misbehavior that led to scandals at Enron and Ahold. --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p. 41.

(28) In recent years *salsa* has undergone a second revolution, *becoming* the hottest hobby to take up from Seoul to Seville. --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p. 56.

このような分詞構文の規則にかなった例は、文法書の用例と同じ種類のものであつて、新しい用法ではない。しかし、*Newsweek*の文末の分詞構文には、文法書の懸垂分詞構文とも異なる興味深い用法が見られる。現在分詞(-ing)の直前にある句、節、文、或いは前に述べられた内容が分詞構文の主語の役目を果たしているのである。

先ず、分詞構文の主語が直前の名詞句と解釈される場合から検討したい。次の(29)では、文末の*protecting*の主語が前置された文の主語*The only base*ともコンマの前にある*the Green Zone*とも解釈され得る。しかし、他の例(30～33)から推して直前の名詞句*the Green Zone*と考えるのが妥当であろう。

(29) *The only base* within the city will be inside *the Green Zone*, *protecting* the CPA

and what is being planned as the world's largest U.S. Embassy. --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p. 21.

文末の現在分詞 *culminating* の主語は文の主語でも that-clause の主語 the first floor でもなく、*culminating* の直前にある名詞句である。(31)の *banning*、(32)の *ranging* の主語も同じく直前の名詞句である。

(30) The conventional answer is that the first world war grew from *a series of accidents, culminating* in the assassination of Austria's Archduke Ferdinand in Sarajevo. --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p. 55.

(31) Last week the U.S. House of Representatives passed *a "cheeseburger" bill, banning* lawsuits against food companies for making customers fat. --*Newsweek*. Mar. 22, 2004, p. 6.

(32) The court's investigative judges are currently reviewing about 450 cases, *ranging* from looting, smuggling and money laundering to possession of bomb materials. --*Newsweek*, May 17, 2004, p. 25.

次の(33)の *disillusioning* の主語については3通りが可能である。(a) whenの節の動詞 *discovered* の目的語である that 節の部分、(b) whenの節の主語 *investigators* から *contributions* まで、(c) *Roh's image* から *contributions* まで、つまり前の文全体である。この例は、名詞句とは限らず *disillusioning* の前に置かれた名詞節、前の文全体が分詞構文の主語となることを示している。

(33) Worse, *Roh's image as a clean-hands politician went out the window when investigators discovered that his campaign accepted almost \$10 million in illegal contributions, disillusioning* millions of the young voters who supported the former human-rights lawyer. --*Newsweek*, Mar. 22, 2004, p. 34.

以上、分詞構文の主語に関して文法書の説明には見られない新たな傾向、つまり前置された名詞句、名詞節、或いは前文全体が分詞構文の主語になりうることを示した。分詞構文の直前にある文の要素が分詞構文の主語として機能し、主語として解釈されることが文末の分詞構文の増加に加担しているという結論になった。

もう一つの *Nesweek* 誌の際立つ特徴は、文末の分詞構文が重複して用いられていることである。コンマで並ぶ場合(34)、and で連結される場合 (35、36、37)、2つの分詞構文の後に副詞 (thereby) を伴って更に分詞構文が続く場合(38)などが見られる。

(34) *They* (= hundreds of *screaming* fans) 're packed around the impromptu stage, *waving* homemade AVRIL WELUVU banners from the tiers above, *shooting* cell-phone photos from the escalator. --*Newsweek*, Mar. 22, 2004, p. 52.

(35) *Bystanders* put on a show afterward for the Arab cameramen, *abusing* the corpses and *setting* the victims' cars on fire. --*Newsweek*, Apr. 12, 2004, p. 21.

(36) *Mexico* (as well as Peru) recalled its ambassador, further *isolating* the Caribbean island and *prompting* fresh speculation about Castro's future. --*Newsweek*, May 17, 2004, p. 64.

(37) Gradually, *they* (= Senegal's groups) won over the city's deprived suburbs, *slamming* corruption and *urging* unemployed young men to turn their lives

around. --*Newsweek*, Mar. 22, 2004, p. 54.

- (38) *Israelis are occupying others' land, keeping thousands in prison, destroying homes and orchards, thereby denying the Palestinians any prospect of a future in peace and prosperity.* --*Newsweek*. Apr. 12, 2004, p. 11.

以上(34)~(38)の用例では、文頭にある文の主語は重ねて用いられている文末の分詞構文の主語と同じである。文の主語の動作が主節の動詞に加えて、文末の分詞構文によって表される動作が同時並行的に行われていることになる。「同じ主語による2つ動作が同時に起こる場合は、通例その一方を現在分詞によって表すことが可能である」(Thompson & Martinet: 378)という文法書の用法と類似している。しかし、ここで扱っているのは3つ以上の動作が同時に起っている場合である。接続詞を用いるよりも文を短縮し、更に同時に複数の動作、出来事が起こっていることを示すには好都合な方法である。この便利さゆえに、分詞構文は文末に重複して用いられる傾向にある。

6. おわりに

分詞構文が使用される位置に関して、英文法書と *Newsweek* 誌の相違を明確に数値で示すことができた。文法書の分類(表1~表2)と *Newsweek* 誌の分類(表3~表5)との比較は文法書の説明と現在の書き言葉との「ずれ」を明白に示している。即ち、文法書の用例とは異なり、*Newsweek* 誌では文頭に(-ing)で始まる分詞構文は少なく、文末の用例の方がはるかに多い。

最初に、文頭の用法の減少の原因を考察した結果は以下の通りである。

- ① ことばの経済性が重要視される現代にあつて、動名詞構文との混同を避けるために、-ingで始まる分詞構文が減少したと考えられる。現在の語順の固定した英文構造では、文頭にあるものが主語だと判断する意識が強く働く。主語として機能する動名詞構文に押されて文頭の分詞構文の用法は衰退の傾向にあると推察される。

次に、文末の用法の増加の要因に関して考察した結果は2点に要約される。

- ② 分詞構文の主語に関して文法書の説明には見られない新たな傾向、つまり前置された名詞句、名詞節、或いは前文全体が分詞構文の主語として用いられていることを示した。分詞構文の直前にある文の要素が分詞構文の主語として機能し、主語として解釈されることが文末の分詞構文の増加に加担しているという結論になった。
- ③ 文末の分詞構文は重複して現れる。この場合、分詞構文の主語は文の主語と一致していることが多い。文の主語の動作は主節の動詞に加えて、分詞構文によって示される動作が同時並行的に行われていることになる。「同じ主語による2つ動作が同時に起こる場合は、通例その一方を現在分詞によって表すことが可能である」(Thompson & Martinet: 378)という文法書の用法と類似している。しかし、ここで扱っているのは3つ以上の動作が同時に起っている場合である。接続詞を用いるよりも文を短縮し、更に同時に複数の動作、出来事が起こっていることを示すには好都合な方法である。この便利さゆえに、分詞構文は文末に重複して用いられる傾向にある。

以上、分詞構文の現れる位置の変化は用法の変化でもあることを主張し、新たな分詞構文の用

法に注目した。現在分詞-ing の文中の用法、過去分詞-ed の用法については今後の課題とした
い。

注

1. 本年度（平成16年度）の卒業研究の4人の学生に現在分詞（-ing）について調査してもらった結果が以下の表である。

Newsweek, May 12, 2003 (4H1 中島恵美)

	文頭	文中	文末
-ing	3	26	25
having + 過去分詞	0	0	1
being + 過去分詞	0	0	0
合計	3	26	26

Newsweek, June 9, 2003 (4H3 坂井なつ美)

	文頭	文中	文末
-ing	10	6	52
having + 過去分詞	1	0	1
being + 過去分詞	0	0	0
合計	11	6	53

Newsweek, March 8, 2004 (4H4 井上裕美子)

	文頭	文中	文末
-ing	7	18	34
having + 過去分詞	0	0	1
being + 過去分詞	0	0	0
合計	7	18	35

Newsweek, April 5, 2004 (4H1 山本祥子)

	文頭	文中	文末
-ing	5	16	36
having + 過去分詞	2	0	0
being + 過去分詞	0	0	0
合計	7	16	36

文 献

- 荒木一雄・安井稔 [編] 1992. 『現代英文法辞典』三省堂.
- Coulmas, F. 1993. (諏訪功他 訳) 『ことばの経済学』東京：大修館.
Newsweek, March 22, 2004.
Newsweek, April 12, 2004.
Newsweek, May 17, 2004.
- Thomson, A. J. & Martinet, A.V. 1969. *A Practical English Grammar 2nd Edition*. Oxford University Press.
- Thomson, A. J. & Martinet, A.V. 1985. *A Practical English Grammar 4th Edition*. Oxford University Press.
(江川泰一郎訳 『実例英文法』東京：オックスフォード大学出版局1988)
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*.
London: Longman.